

# 『地域の宝』を世界にひらく 世界遺産の可能性

宗像大社宮司、宗像国際環境会議副会長 葦津 敬之

## 日本神話と 古代の宗像大社の歴史

宗像大社は日本神話に登場する非常に古い神社です。日本神話は『古事記』『日本書紀』という、約1300年ほど前に編纂をされた書物に記されています。われわれ神社人は、それらを中心に歴史を紐解いていきます。

日本神話ではまず、天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）が誕生し、いろいろな神様に続き、伊弉諾（イザナギ）、伊弉冉（イザナミ）という男女神が誕生します。その後、伊勢神宮に祀られる天照大神（アマテラスオオミカミ）が誕生します。天照大神は天皇家の皇祖神つまり祖先神ですが、その娘の田心姫神（タゴリヒメノカミ）、湍津姫神（タギツヒメノカミ）、市杵島姫神（イチキシマノヒメノカミ）の「三姫神」が宗像の神様になります。

日本神話のかなり早い段階で「此即ち筑紫の胸肩君等が祭（いつきまつ）る神」と宗像の豪族の名前も出てきます。天照大神が下した命令を神勅（しんちょく）と言い、宗像はその神勅が下った非常に稀有な神社です。「汝三神（いましみはしのかみ）宜（よろ）しく道中（みちのなか）に降居（くだりま）して、天孫（あめみま）を助け奉（まつ）り、天孫に祭（いつ）かれよ」とあり、三女神は宗像の地に降って天孫すなわち歴代天皇を助けなさい。そうすれば歴代天皇が祀るでしょう。というふうに書いてあります。

2つの島と本土の3か所に神様が降臨し、三宮

を合わせて宗像大社と言います。最先端の神の島、沖ノ島は、約145キロ先が朝鮮半島です。宗像大社の神勅の扁額は三宮それぞれに掲げられ、祀られています。

宗像は日本が最初に開国した場所でした。まず朝鮮半島との行き来が始まり、それが中国大陆へひろがり、伸びる拠点でした。後に港の機能は博多湾へ移り、最後は太宰府政庁へ移りました。今で言う外交・通商・国防の機能があったと思われる、大和朝廷と連携しながらその機能をきちんと果たした。歴代天皇を助けるとは、そんなことだのご理解いただければ結構かと思います。

宗像一族の交流は現在の東西の文化が交流するマカオあたりまでひろがっていました。想像以上の広域で動き回った海洋民族でした。

## 沖ノ島の8万点に及ぶ国宝

歴代天皇から祀られた1つの証拠が、8万点に及ぶ国宝です。ずっと手付かずであった、朝鮮半島に最も近い沖ノ島を戦後、宗像大社が調査しました。発掘と言っても地面を掘らず、地表などにあるものだけで約10万点を採取し、そのうち整理がついた8万点が全て国宝に指定されました。現在の奈良県から持ち込まれたものが大半だと思いますが、当時の日本の最高技術でつくられ、歴史的な紐付けもできるため、国宝に指定されました。

日本にはもともと文化も文明もなく、全て大陸から来たというふうに学校教育では教わりますが、

## 葦津 敬之（あしづ たかゆき）……………

### 略歴

1962年福岡市生まれ。1985年皇學館大學を卒業後、同年熱田神宮に奉職。1987年神社本庁に奉職。1996年主事。総務課長、情報管理課長、教学課長、国際課長、2009年参事、財務部長、広報部長を経て、2012年4月に宗像大社に奉職。2013年権宮司昇任、2015年6月宮司昇任、現在に至る。2014年から宗像国際環境会議副会長就任。ライフワークは自然環境問題。



宗像に着任して歴史的経緯を見ると、どうもしっくりこない。冷静に考えれば、大陸から入ったものも当然あるが、宗像の出土品を見ると、日本から大陸に行ったものも多いのではないかと認識しています。

海洋国家の日本は海の向こうに目が向く傾向がある。宗像の沖合は荒海、荒波の玄界灘で、水深が浅いため三角波が立ちます。非常に厄介な波で前後斜め横から波が立つので、船がひっくり返る。ということは日本では三角波を超えられる船を造っていたことになります。中国の研究者によると、大陸国家の船は造船技術が進歩しにくいいため、三角波に当たってけっこう大破したのではないかとされています。宗像海人族は三角波を超えられる船を持ち、大陸との往来をしていました。交易には、帆があり風の力を受けながら進む構造の船でないと無理でしょう。三重県から出土した5世紀初頭の「船形埴輪」を見ると、けっこう立派な船です。

沖ノ島から出土した「金製の指輪」は、朝鮮半島から伝わったとする研究者もありますが、出土した指輪を比べると、どう見ても沖ノ島のほうが仕上がりがいい。奈良県の藤ノ木古墳から出土した指輪もすばらしいですから、日本製だったとしても全然おかしくない。また、沖ノ島から「三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）」が複数出土しました。研究者は中国製と言いますが、実は中国では一枚も出土していません。これも、福岡県で紀元前200年頃の鏡の型枠が出土し、日本で

も鏡をつくっていたことがわかりました。漆器も日本のほうが大陸より古かったとわかっています。

文明のベクトルは「大陸から日本」と学校教育で強く印象づけられていますが、「日本から大陸」があっても当然、おかしくない。そこでは九州、宗像にどんな歴史的な役割があったのか？

伊勢神宮が20年に一度、建て替えを行う式年遷宮は約1300年前に確立し、今も建物は1300年前の形そのままです。当時の三重県や奈良県あたりには、それを建てられる技術がありました。奈良では世界最古の木造建築、法隆寺が建立されています。修理した宮大工の「最後の棟梁」こと西岡棟梁の一番弟子の小川三夫さんは、当時の日本の建築技術はすごかったと話されていました。

## 世界遺産登録につながった 3つのキーワード

今年で登録8年目を迎えますが、宗像は神の島の沖ノ島、本土から約11キロ沖合の、大島の中津宮、本土の辺津宮、日本神話に出てくる地元豪族の古墳群の4つが世界文化遺産の構成遺産と認められました。その道のりは本当に厳しく、いい勉強になりました。

世界遺産には2つの大きな関門があります。まず、世界の研究者で組織するユネスコ諮問機関ICOMOSで一次審査が行われます。実はほぼ零点に近い状態でした。研究者は神話と現実をつなぐのに抵抗があったみたいで、文化庁中心に時間と手間をかけてつくった推薦書から『日本書紀』の



日本神話を外しました。そうしたため、ストーリーが繋がらず、推薦書が「点」でしか書けていないという問題がありました。

私も全部読みましたが、正直、何が書いてあるかよくわからない。当時の小川福岡県知事も英文の推薦書全部に目を通して、私に「何が書いてあるかわからない」と電話をかけてきました。

二次審査はユネスコ出向中の21か国の大使が評決権を持ち、所管は外務省に変わります。

ICOMOSの勧告から1か月半後、外務省に首相官邸から「登録に向け全力を尽くせ」と強い指示がありました。外務省の方は本当に一生懸命で、0泊3日ぐらいの日程で2回、パリに行ってくださいました。その時「推薦書が使えない。どうしようか?」と暗礁に乗り上げたのですが、私は「難しいことを難しく考えるのはやめませんか?世界に通用するキーワードを探し、それから説明しませんか?」と言いました。挙がったキーワードが「スピリチュアル、エコロジー、アニミズム」でした。たまたま後から言われて気づいたのですが、偶然、英語の頭文字が「SEA(海)」でした。

地球環境が国際問題になり、スピリチュアルやアニミズム、自然崇拝のような考え方が世界中で知られるようになっていました。宗像はその形態を今でも残していて、外国人に説明するにはちょうどいいキーワードになる。エコロジーは、宗像も海の問題を抱えていて、その方面の活動もやっていましたので、これも加えました。

3つのキーワードは見事にマッチしました。宗像にユネスコの大使が数名来ましたが、アフリカの方は「自然崇拝、アニミズムか。これでよかった」と言いました。他の国の方も同様で、それが二次審査での逆転、全員賛成での登録につながったようです。

スピリチュアル、アニミズムについては、本土の高宮祭場は「神籬(ひもろぎ)」という木で社殿がない。沖ノ島は「磐座(いわくら)」という岩です。神社のもともとの姿はこうだご理解ください。神社に社殿ができるのは仏教伝来後、その影響によるものでした。宗像には社殿のない祭場があり、それを3つのキーワードを使って海外の方にご説明しました。

2024年に、山村善太郎さんが神の島、沖ノ島で数年にわたって撮影した写真集を出版されました。島には巨岩がたくさんあり、フラットな場所に8万点の国宝が転がっている。岩を中心とする形で祭祀が行われてきています。岩の手前の社殿は江戸時代後期に造られたものです。環境はすばらしく、朝や夕方に神々しい風景がみられます。

磐座は沖ノ島だけではなく日本全国にあります。石川県のある神社の磐座は、社殿を何度も建てようとしてもいつも台風などで壊されるので「神様が社殿を嫌がっている」と思われ、元の形に戻されました。沖縄の斎場御獄(せーふあうたき)もそうですが、日本の神社は基本的にもともと社殿がなく、神武天皇が滞在されたという、北九州にある神社の旧跡にも社殿はありません。

あらゆるものに神々が宿る自然崇拝の考え方は日本の神社だけではなくありません。世界でいろいろな宗教が誕生しましたが、人類のそれ以前の信仰はだいたい自然崇拝から始まっています。アメリカのネイティブ・アメリカン、オーストラリアのアボリジナル、ヨーロッパのケルト文化のような古い民俗宗教のほとんどはアニミズムで、あらゆるものに神々が宿る考え方です。昔は、それは下等な宗教で、原始宗教と言われましたが、環境問題への関心の高まりとともに、非常に大切なものだと言われるようになりました。三十数年前と今では状況が変わり、世界の人々がアニミズムに関心を持つようになっています。

## なぜ、環境問題に取り組んでいくのか?

宗像の世界遺産登録のタイミングで、静岡県から「組まないか?」と、海の神殿「宗像」、山の神殿「富士山」を並べる取り組みをしました。それまで国内には世界遺産のネットワークがなく、横のつながりは初めてでした。横のネットワークを組まないのはもったいない。世界遺産のある地域が連絡協議会のようなものをつくったらいろいろなことができると私は思います。たとえば外国人観光客に、いろいろな地域の世界遺産を回れる観光ビザを発給するなどの方法で、ぜひ世界遺産同士で組めたらいいと思っています。

3つのキーワードに「エコロジー」もあります  
が、なぜ宗像で環境問題に取り組むようになった  
のか、お話しします。

私は小学生まで宗像で育ち、離れてから数十年  
たって戻ったら、風景が子どもの時と変わってい  
ませんでした。「やっぱりいい場所だ」と思ってい  
たら、漁業従事者の方が「大変だ」と言っている。  
最初は何を言っているのかよくわかりませんでした。  
東京で長く、森を中心に環境問題に関わる活動を  
していたので、海のことも予備知識としてはあり  
ましたが、まさか福岡県の宗像の海がそんな状況  
だとは想像もできませんでした。

よく聞くと魚が獲れなくなった。確かにデータ  
では10年間で福岡県の漁獲高は半減し、魚種も変  
わった。南方系の魚は揚がっても地元の本来の魚  
が獲れない。海水温が上昇して磯焼け、磯枯れで  
海藻がなくなる現象が起き、それに伴って漁獲高  
が減少。さらに福岡県の玄界灘、宗像は大陸に近  
く、海外のゴミが大量に押し寄せる問題も抱えて  
いました。

そこで「宗像国際環境会議」が立ち上がるので  
すが、まだ世界遺産登録前でした。私は「あえて  
表に出しませんか？」と、当時の市長と交渉しま  
した。日本人は悪いもの、まずいものは隠そうと  
する傾向がありますが、「ただ悪いことだけ出すの  
ではなく、何とか改善する形をとれば、国際機関、  
海外の人は認めてくれると思います」と申し上げ  
ました。富士山がゴミの問題を隠し、そのため世  
界遺産登録が遅れたことを知っていましたから、あ  
えてそう進言をしたわけです。市長の「それじゃ、  
やろう」という大英断の結果、海の再生のための  
「宗像国際環境会議」を立ち上げる動きが始まりま  
した。

これは結果として、世界遺産登録には非常にい  
い効果をもたらしました。「バッファゾーンと呼ば  
れる周辺環境まで考えている世界遺産はない。そ  
れに先んじて宗像は海の再生事業をやろうとして  
いる。これは世界のお手本になる」というユネス  
コ側の話を、後で外務省を通じて聞きました。

年1回「宗像国際環境会議」を開き、海の再生  
事業として「竹魚礁」を海に沈めたり、海岸清掃  
をしています。それに加え次世代の育成プログラ

ムもつくっています。

第37回の「全国豊かな海づくり大会」では天皇  
陛下を宗像にお迎えしましたが、稚魚の放流行事  
は天候の関係で中止になりました。古来から天皇家  
と関わりが深い地域ですが、陛下が入られたのは  
初めてでした。宗像にとって歴史的に非常に意義  
のある日ということで、宮司の特権で「豊饒祭」  
を始め、稚魚の放流などを行っています。神社が  
お祭りをいったん始めると後輩はなかなかやめる  
ことができないので、おそらく数百年にわたって  
続き、地域に根づくと思われます。運営にはいろ  
んな企業・団体が参加しています。

「宗像国際環境会議」は2024年で11年目でしたが、  
第6回から「常若（とこわか）」というキーワード  
で議論しています。常若にはきちんとした定義が  
まだありませんが、環境問題に関わるキーワード  
がSDGsとかサステナブル・ディベロップメントな  
どカタカナや英語だとわかりにくい。キーワード  
は「常若」で、それを定義づけしようと議論を続  
けています。

宗像の海、玄界灘の位置とその特徴ですが、大  
陸にきわめて近い。今、海洋ゴミが問題になって  
いますが、その環境指標がとりやすい。水深が浅  
いので三角波も立ちますが、海水温度が一気に上  
がる地理的条件があります。2016年のデータでは、  
すでに海面水温が30度になっていました。水深が  
浅いため、暑くなればかなり底のほうまで温度が  
上がると推測されます。

豊饒祭でタイやトラフグの稚魚を放流しますが、  
昨年、地元の漁業組合長から、放流したトラフグ  
が宮城県沖で揚がったと連絡がありました。宗像  
で放流したトラフグの稚魚が豊後水道を経由して  
北上したデータが取れました。帰ってこないのは、  
やはり暑すぎるからでしょう。今の玄界灘はそん  
な状況にあります。

それから線状降水帯です。今や九州では毎年  
のようにあられ、関東方面でも出ます。海水温度  
の上昇とともに、大雨が降るといろいろ影響が出  
てきます。非常に悪いことに、大雨が降れば陸地  
から川を通じて建物の建材・家電・家財道具など  
いろいろなものが海に流れ込むことがあります。海  
洋ゴミはマイクロプラスチックのような海辺のゴ

ミだけでなく「海底ゴミ」というタチの悪いものもあり、魚が獲れない時、宗像の漁師はボランティアでそれを引き揚げます。

地球の7割は海で、陸地は3割しかありません。海水温度が上がると地球全体に大きな影響をもたらすことが意外に知られていません。海水温度が正常化すれば、海はいろいろなものを育んでくれます。海をなんとか元に戻すことが重要な課題だと思っています。

「宗像国際環境会議」は毎年10月に3日間、会議・ビーチクリーンや竹漁礁づくりのフィールドワーク・子ども向けプログラムなどを、そしてその翌日に豊饒祭、稚魚の放流行事を行います。

会議のセッションでは講師が40名ぐらい来ますが、人数が多いのと、編集してYouTubeで公開する関係で、要人であっても、海外から来ても、一人につき話せる時間は15分だけです。ほぼ謝礼なしのボランティアで、半分以上の方には交通費も支給されません。それでもたくさんの方が来る。最終的に「宗像宣言」をまとめて、宗像の現在の状況とその年の環境会議での話し合いについて環境大臣に説明する形をとっています。

ビーチクリーンについてです。玄界灘の海岸は取っても取ってもゴミが漂着し、翌日はまた同じ状態という感じなのです。それでもゴミを淡々と拾って、我々がコストを負担して処理すればいいと言っています。沖ノ島も台風が来るとゴミだらけになります。私はあえてその写真も見せるようにしています。地元の若者のボランティアを募って、船をチャーターして沖ノ島まで行ってゴミを拾い、持ち帰って焼却する作業をしています。

里山の竹を何とか利用できないかと始めたのが「竹漁礁づくり」で、地元の水産高校の生徒が考え、我々の先生になって始めました。竹は海中で流されて壊れますが、魚やアオリイカの産卵場所になります。また、竹に鉄の溶融スラグの重しをつけて沈めると、鉄分とフルボ酸が結合した「フルボ酸鉄」が海の中に落ち込んで藻が付き、藻場が作られます。これは日本製鉄の技術で、全国各地で行われています。

難しい話ばかりでは嫌がられますから、このようなちょっとした楽しみもつくり交流の場にして

います。「みぞぎ」は「せっかく海の問題を議論する会議を海の近くでやっているのに、海に入らないのはおかしい」と、自発的に始まりました。人気が出て参加者が増えています。

こうして様々な行事が膨れ上がっている状況で、水産高校の女子生徒がつくってくれた歌がテーマソングになっています。

SDGsは非常にいい取り組みだと思いますが、宗像では「常若」という文化文明論を入れたいので、それを基本的なテーマに掲げています。女性の方から「常若とは、いつまでも若くい続けろということですか?」とよく言われますが、「そうではありません。命をつなぐことです」と申し伝えています。人間だけではなく、いろいろな、多様な命をつなぐ、つながっていくというイメージです。

## 環境問題の本質とは？

サステナブル、持続可能という言葉が各方面で使われますが、それはどれぐらいの尺でしょうか？

私の仲間たちの間では「1000年サイクルではないか?」と言っています。持続可能な時間軸とは100年や200年ではなく、1000年単位ではないか、ということです。

日本にも1000年単位は意外にあります。伊勢神宮は約2000年前にできましたが、神社界の歴史では比較的新しい。鏡、剣、勾玉の「三種の神器」は当初、歴代天皇の手元で継承されましたが、「鏡を別のところで祀りなさい」という御神託が下り、伊勢の地が選ばれ、そこに伊勢神宮ができました。神社は全国に約8万社ありますが、伊勢神宮だけは特殊で天皇の神社です。それゆえにいろいろなことが厳格に守られるのが大きな特徴です。たとえば伊勢神宮の参道の木は、邪魔でも切ってはいけなくて、そのままにされます。建物に木がかかったら建物のほうを切ります。それはやはり、アニミズムの文化の根底と自然に対する考え方が、如実に出ていると思います。そんな基本的な考え方、価値観をもとに伊勢神宮は2000年の時間を経てきました。20年に一度建て替える「式年遷宮」のシステムも、それを補完すると私は思います。

伊勢神宮の面積は東京の世田谷区と同じぐらい



ですが、ほとんどが森で、よく「鎮守の森」と呼ばれる周辺の森、原生林の森、ヒノキの経済林の三層構造です。経済林は比較的新しく大正時代に造成されました。江戸時代、お伊勢参りが殺到すると山の木を切ってそれを燃料にしてお客様をお迎えしたため、伊勢の山が激しく荒れてはげ山になり、五十鈴川の水が干上がった記録もあります。それを反省して復活させようと当時、東京大学の林学の先生方が集まって「宮域林」の森づくりを始めて、ようやく100年を超えたところです。

林業ではだいたい50年で木を切りますが、伊勢神宮の森は200年、ヒノキを育てると定めています。これまでの100年でヒノキの間に生える落葉広葉樹の間伐材が出て、それを市場で売った利益を育林にあてて山に戻しています。また、落葉樹が葉を落とすと養分になり、すばらしいヒノキが育ちます。「混交林」という林業の世界では理想的な森が、伊勢にはできています。豊かな自然の中で先人たちの知恵を埋め込みながら、神への畏れを忘れずにつくってきたものです。

同じ大正時代に、都会の練兵場跡地に神聖性を出してつくられたのが明治神宮の森で、渋沢栄一が「内苑外苑構造」を考えました。外苑に青少年のための事業施設をつくり、そこで得たお金を内苑の神社の鎮守の森の部分に投じる設計です。伊勢神宮と明治神宮は対照的なようで、実は根っこは一緒なのです。

地球環境問題で、CO<sub>2</sub>削減などいろいろな取り組みが行われますが、私どもは「宗像国際環境会議」に来られる環境省の方に「自然再生事業をできませんか。それこそ本当の公共事業ではないでしょうか？」と、ずっと言い続けています。CO<sub>2</sub>削減もいいですが、壊した自然を戻すほうがゆくゆく効果が出ると、常々思っています。壊したものを元に戻す。「自然の摂理と生命の循環」を取り戻す自然再生事業こそ、本当の公共事業で、それを進めてもらいたいと思っています。

私どもが目指すものは何か。そのキーワードはシンプルです。「神々が住む海、神が鎮まる海を取り戻そう」です。今でも荘厳な海ですが、昔の人から見ればだいぶ荒れました。昔の海を取り戻したい。神々（こうごう）しい海、神々（かみがみ）

しい海をみんなで取り戻す。それを目的に海の活動をしています。こう言うと宗教的、神秘的に思われそうですが、意外によく伝わります。

「常若」のような自然再生事業を積み重ねれば神々しい環境が戻ってくる。と同時に忘れていた畏怖・畏敬の念を思い出して、自然への接し方が変わってくるとも思っています。

私は環境問題に35年ぐらい関わってきましたが、環境問題の本質について次のような持論を持っています。

「環境問題は人々の物欲によるものであり、それは、時間を単純に戻せば解決できるのだが、多くの人は、いったん手にしたものは手放したくない。あの時代には戻りたくない、となる。しかし、地球は、人類が消滅すれば元に戻るのだが、人々は諦めきれない。これこそが環境問題の本質でもある」

年々、地球環境に関わるデータは厳しくなっています。技術も大切ですが、そろそろ、技術だけでは追いつかないところにきている。我々が辛抱をする時代になるのではないかと思います。

では振り返って、日本ではどんな時代がよい環境だったのか。アインシュタイン博士が大正時代に来日し、いろいろな言葉を残していますが、大正11年、1922年に、こう言われています。

「日本では、自然と人間は、一体化しているように見えます。この国に由来するすべてのものは、愛らしく、朗らかであり、自然を通じてあたえられたものと密接に結びついています。日本人は、西洋の知的業績に感嘆し、成功と大きな理想主義を掲げて、科学に飛び込んでいます。けれどもそういう場合に、西洋と出会う以前に日本人が本来もっていた、つまり生活の芸術化、個人に必要な謙虚さと質素さ、日本人の純粹で静かな心、それらのすべてを純粹に保って、忘れずにいてほしいものです」※

日本は明治時代から近代化しましたが、大正時代には、博士の目にはこのように映ったのだと思います。「大正時代に戻れ」と言っても「いまさら戻れない」と誰もが言うと思いますが、少なくとも100年ぐらい前の日本には自然といい形でお付き合いできるシステムがあった。これは1つの参考になるのではないかと思います。

※参考：「アインシュタイン日本で相対論を語る」 アルバート・アインシュタイン／著、杉元賢治／編・訳 講談社2001